

芭蕉翁發句諸帖大成

一

記	66
號	
冊	5

中村俊定文庫

文庫 18

809

1



芭蕉發句評林叙

蓋人情之於心口也難矣有發其所欲而後倍宴觸物吐奇出妙皆以英才子之所為也此則和漢所同而詩歌連誦之道亦是故明千世焉夫誦諧者滑稽也滑稽者酒器也故有句法以往至如能使入罄情干茲而感於鬼神豈謂非和歌之一體也此道既闢君子人々莫不悅無小大者焉



於是乎有正風異同之流然後多岐止年
鹵莽滅烈而又好事之者交作特走正路
者至稀也夫天不止於斯文哉遇有芭蕉
翁能定其式不許句令此故始人知歌連
之幹雖然其道深遠非容易可升其堂也
以予觀之翁也實可謂誅祖也而已然輓
近曙紫庵杉雨子克嗣翁之誅脉謾不涉
雷勦之說而埋頭環堵爰反覆誅理考證精

究既有余年干此矣嘗撰翁之佳句百余
杉子今作句解臻其證歌及和華之事實
每句之余意无不筆記不屑考證也嘆可
謂乎蕉門之股肱誅學之英雄也耳此則
所以冠紫交兩之諸子各自以此書深藏
金滕者也又然今秋其撰既成諸君門人
慮紙魚之患將上梓焉不佞亦以在校正
之列畧題其始不佞固腹不藏墨何如當

序跋之器耶固辭不能故姑書塞於其需
云此亦覽者之一笑也

寶曆丁巳孟秋

綠陰堂琴子水識



曝は志菴乃困以推教の朽々机と
はし新古今御書と編て長次あり
檀林くちり流りの風骨をわきま
芭蕉如く及日記御和集は
今見しき句選をの悦りなり
是乃句是いふをいふを教
竜島乃是物々を思練る風流の
君子くはる唐と入相控下り

書法論の可い者一巻ありし事也。可い
あきしはしきし。又此のうゑにむかひし。も
まをけし。好むも。たつり。や。式部。の。書。も。
お。た。し。た。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
と。稽。の。と。も。て。今。や。凡。雑。の。事。も。た。つ
硯。の。海。の。茶。海。も。深。く。も。た。掉。の。書。也。
少。頃。無。く。作。り。物。獲。敷。と。も。い。ふ。事。も。
い。わ。く。事。の。序。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。

は。ま。ま。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
と。稽。の。と。も。て。今。や。凡。雑。の。事。も。た。つ
硯。の。海。の。茶。海。も。深。く。も。た。掉。の。書。也。
少。頃。無。く。作。り。物。獲。敷。と。も。い。ふ。事。も。
い。わ。く。事。の。序。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
は。ま。ま。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
と。稽。の。と。も。て。今。や。凡。雑。の。事。も。た。つ
硯。の。海。の。茶。海。も。深。く。も。た。掉。の。書。也。
少。頃。無。く。作。り。物。獲。敷。と。も。い。ふ。事。も。
い。わ。く。事。の。序。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
は。ま。ま。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。
と。稽。の。と。も。て。今。や。凡。雑。の。事。も。た。つ
硯。の。海。の。茶。海。も。深。く。も。た。掉。の。書。也。
少。頃。無。く。作。り。物。獲。敷。と。も。い。ふ。事。も。
い。わ。く。事。の。序。も。た。つ。り。し。事。も。た。つ。り。し。事。も。

しそ葉のわらわのまはるは跡の
おとしも唐のうらみのうらみとて
ゆらぬまはるのうらみとて
化はきて風流のうらみとて
いさよのうらみとて
射して得するおとしも
只をまはるのうらみとて
うらみとて

うらみとて
ゆらぬまはるのうらみとて
化はきて風流のうらみとて
いさよのうらみとて
射して得するおとしも
只をまはるのうらみとて
うらみとて

干のたがうあまの角文のうらみとて

七のたがう

叶極不月



芭蕉後句評林前集

春之部

○蓬萊のくさくさいの初伎

芭蕉のくさくさい

このくさくさいは人言はくはくは花桐子
此句はかたがはくさくさいと好く桐子掃を句中か
かたがはくさくさいと好く桐子の句の中

○二日ふもぬらひの花のま
雲のまはくさくさい一え日か桐子掃一とくさくさいの
けけの句の中くさくさいと好く桐子の句の中二日に



曙紫菫

杉雨編

李下唐

冠世



曙郭亭

及雨



あつりては二日小も却森とて梅の花は
かりひるをさるは濁の美は新く屈原の騷
探りてはさるく一ぬりては白氏文集
勸学子計一年有陽春只人のみりては
いしうりてはさるくつてはさるく

おのまのほは花のまは中ふは
ほかゆもまのまはさるくは
かり

○雪のまはさるくは
美連ふも梅の花まとはは
こはまはさるくは

いふる一とははさるくは
まのまはさるくは
雨はさるくは
百今 ぬの名はさるく
梅の花折はさるくは

雪のまはさるくは
○山里はさるくは
梅の花

雪の如くはつらとほろろと
 小枝をしのびて雪のまじりて
 手杖のしほりもささく
 と在る中ねの誠を
 らもく用てり
 雪の日は長
 曆日寒盡不知年
 ○ けしきよ 教の中ねる梅の花
 新古今式子内親王の
 詠つる
 ソロ 和歌

けしきよ 和歌

けしきよ 和歌

○ けしきよ 和歌

けしきよ 和歌

けしきよ 和歌

けしきよ 和歌

女はわらうまにこゝろくは時よけふ小こゆりこゝろまよと人の
じよこゝろくと父母との中ねの妹なるこゝろ小よまはれ
こゝろもめり程の終やなぬもぬり谷のこゝろ新の以
狂祿

○羊あはれよ女あはれなりとてあよまじ
のふ地流はくもふのふりやん

○人もんぬまや鏡のこゝろの梅

目めあめまやじろくまなりぬれぬふりこゝろの梅は
人しぬ教の梅は清き名おまじり自ひり流るんぬ
こゝろ只人ふもあききりこゝろ安スルれと梅のこゝろあ
よまこゝろぬれも鏡の月のまゝに筆に金破梅あ
んちぬれ

のそふもかといふとて人真まきま素堂あまの此を教自
ひまき人び初ぬの山は後といふははしこゝろこゝろ
蓮ニう説く予月あめぬれあはれあまこゝろまぬれ
月は鏡こゝろとて時流はくもふ

○梅よとまよこゝろこの宿のこゝろけ

こゝろ東武流行の箴別三候のあぬりこゝろ初まのねは
あきりこゝろに梅もまよまよもまよこゝろけりまのあは
こゝろけりこゝろけりこゝろと流行こゝろ人れあまの
地一京流一句こゝろあまのまよこゝろこゝろは推の友
りこゝろこゝろまよこゝろまよこゝろけりこゝろ

○ まさゆめ 蝶 一乃 棠つてふ 原のり

道中 庚寅とてしつとていふ所 新古今に大僧正のま

津宮いと春の風の淋きなむ 女につてふ 朝の玉の

季と希まのかけ 今もく不破の言 屋の板庇 荒らしてさる

淋しと 飯まの 長ゆけ かつしつとていふ

朝の玉水の 樽の 古棠 小ほしとらうとていふ 小法師

昨あうら 盧山 雨夜 中菴 起林ゆ 継文 佳らわ

これこりて まの 切束 忘れぬと ぼれくの 泣 啼々 年の

ろくろ 紀も 変わら 一とていふ 蝶 一の 棠に つてふ

ゆの 下と まう 何と ぬく かつしつとていふ 終る 終

○ 八九ら 空く 切津 柳 くれ

ぬう ぬと うや 香 終る 降と 町く 日の 陰 くれ

御く 柳乃 糸 終 終き 八九ら も 元 小 雨の 降 くれ 在
何と ぬく 糸 終の 終 くれ 終る 或 終 僧の 身 くれ
この 句の 半 終と 終と 予 け 句の 終 終 終
只 昨 終
こと かつしつとていふ 終
さう 終
かう 終
~~~~~ 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終

○ 水 けい 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終

太上天皇の御ま

様 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終

是 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終 終

しんせうせうしん御製歌ののまゝのふ海會のなはらぬま  
春のよめゆふくしんせうのまゝのふもさるかすはま  
了急のまゝれんげよまゝのふらゝくくと只のまゝ  
よまゝれんげよの海會の派とていふまゝはらぬの  
才一し

○ 京中よめおもしろくはらぬま

あけのしんせう心性定まらんといふ類あり

中を雀立つておもしろくはらぬまのふらゝくくと只のまゝ

○ 旅鳥古巣を梅よりおもしろく

奔連法師

おもしろくはらぬまのふらゝくくと只のまゝはらぬま  
ふ根よりおもしろくはらぬまのふらゝくくと只のまゝ古詩

われももろくはらぬまのふらゝくくと只のまゝ

○ 父母の志きりに恋しき子のま

或集ふ志きりに恋しき子のまのふらゝくくと只のまゝ  
ふらゝくくと只のまゝ

山崎のふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ  
のふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ

○ 茶畑より花を眺める雀のま

おりのふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ  
ふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ

ふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ  
ふらゝくくと只のまゝのふらゝくくと只のまゝ

○ おもしろくはらぬまのふらゝくくと只のまゝ

箭の才小まき堂の物りり是に表娘白皇の時共お  
と見え人初く物りりも物之詩小も林蒼何處吟  
簫揉嬌柳誰家曝麴塵三日月のつれ

○花重しとまりの羽あけ  
すくましくせめくゆるゆよ暗あし

是則のこいし

朝のしらぬの目とみるまはにけしきの里におれおき  
未の河少反宮行のひ雲の耐きはるはかりの  
物情ありり此の文字は流りしてかし行る

○津波のありひもかけは浪無像

廻るにり色もことありりせりの舟の津はあしそ  
かけぬかのうりりするに寺後お入るり

いかに浪聲の法會のありてふ津波のそは  
半も亦津法の念さけし現世未れなり  
句にりるありりあ津波のそはしけすの  
方後よりつれとみおしおらるるありり  
りはさしおしおしおらるるありり  
とは未れのとみありり  
ゆらに解

あまのうらみははらひけしおれおき  
かろはほろこくありり

○おしとらふおしとらふの歌

あまのうらみははらひけしおれおき  
かろはほろこくありり

かつしのおぼせの端つちまはるの思ひかたぬいふるむ  
思ひのあふの勢ふもつきぬてゆく情まかりもあはれ  
まよひもたけあはくふあはれむのなほおのあはれむ

○唐詩の松ハ花トシテ樹也

此の句のよは諸集に種々の説ありきも申す集り  
この句の事わりくさるゝのそとられハ  
らるはさよのふにたつてはたのふ花とては  
只暗香の地なきもささしとてとととととと  
摩訶尊のふあれしとてささしとてとととととと  
ささしとてとととととととととととととととと  
ささしとてとととととととととととととととと  
況ゆきともたけつととととととととととととと

○淋しさを花のちりてあはれとて

詞書に明すハ核とうや谷の老木のいへる事ささしとて  
ささしとてあはれとてささしとてささしとてささしとて  
ささしとてあはれとてささしとてささしとてささしとて  
ささしとてあはれとてささしとてささしとてささしとて  
源らまのや地しとてささしとてささしとてささしとて  
この詞まにえつくとてささしとてささしとてささしとて  
只、何とて花のちりてあはれとてささしとてささしとて  
かしまゆとてささしとてささしとてささしとて

○起ふ〜酒友小己んぬる小娘

維摩經十喻中ニ此身如夢

新古今集卷第...

ゆりやゆりやうつらゆりやうつらゆりやうつらゆりやうつら  
春眠不覺曉處處聞啼鳥

若仕同くなをさし蝶は花小ねてまの目もむく  
ゆりやゆりやうつらゆりやうつら

○木の下のけしきも鶴もあつらふ  
東武上野ゆりの吟たうらうらう句は眺あふ

花山院のゆり

木の下のけしきも鶴もあつらふ

○つゆ来ぬを安くは梅柳  
遥見人家有花とくしら入のやゆや

アハ後より柳梅はまきまきせと鶴もあつらふ  
ゆりやゆりやうつらゆりやうつら

○さあゆりやうつらゆりやうつら  
残花色暮鳥聲しといえさきまのけしきもあつらふ  
さあゆりやうつらゆりやうつら

さあゆりやうつらゆりやうつら  
かきあつらふさあゆりやうつら  
ゆりやゆりやうつらゆりやうつら

○蛇吟りよとせしあつらゆりやうつら

この世に昔の子の姿あり

あしき教く娘子の毛尻こも

こころふり小對して糸のそりきも因ふと吹母の

しよのいさしやあま

○一里のいれ花子の子孫や

此の八重垣の庄や〜〜〜花子の子孫や

うしろの初めにさ〜〜移るは

○あまのわらわの人の信り

あまの〜〜

よもあしけ〜〜あまのねね花子の子孫や

こころあまのりやま〜〜あまの白〜〜あまの

可〜〜

夏之部

○有〜〜花あまのし 枝ま

是山崎 宗澄の山崎の宗澄の庭おの池ふつ

〜〜〜山崎の宗澄の庭おの池ふつ

〜〜〜山崎の宗澄の庭おの池ふつ

宗澄の山崎の宗澄の庭おの池ふつ

近衛友 宗澄

あまの山崎の宗澄の庭おの池ふつ

あまの山崎の宗澄の庭おの池ふつ

あまの山崎の宗澄の庭おの池ふつ

あまの山崎の宗澄の庭おの池ふつ

あまの山崎の宗澄の庭おの池ふつ





一いふく玉堂閑話小學の子は古事なり 黄鸝也  
子におもし一教の時にあはれし

○ 早苗おも 秋実もまきの日教ふ

奥五

今の白川よそのみちなるは早苗のよみ新法く接地の  
秋のよふやつき一花情のり教のよき一り  
秋のよふよきも一り目まきふ川といふる一り  
徳園は師の地流はかりひらき一りれとよきり  
一り一りこれいふもやまき一り

○ 急深乃 雨や初施る合歡の花

松島もよみふり一り急深の眠る一り一り枝葉  
才一の好也ふり一り造化の天工信也もまきと終

きる一り美人の笑る一り一り急深もよみふり  
一り一り一り合歡の花は西施ふなまき一り一り  
海棠の雨の神を伝はれ一り一り合歡の木  
小一り一り名人の一り一り急深の所  
京師一り一り急深の所

○ 春の人ねえ 跡ぬ花や朝の栗

はくの細るにあり一り西木といふ文や急深西の木  
とまき一り急深の所はあり一り一り行基菩薩も  
急深の所はあり一り急深の所はあり一り急深の所  
急深の所はあり一り急深の所はあり一り急深の所  
急深の所はあり一り急深の所はあり一り急深の所

○ 急深の死ぬまきも一り急深の所



り

三書權立の世ふちあつて  
けり二版切あつて一翻ふりし  
クアありしハタ敷は長  
のく誤兵瓜のまことと  
句くこと大敷をまといふ  
阿れと大敷といふは瓜  
調々乃御まはるる考

○高し破地への入りや爲文文涼

○藤氏瓜の入りや爲文文涼

三日月と花ふは後の句と  
うゆ未考るは破地への  
入りや爲文文涼

○おかしはあつて悲し  
けり二版切あつて一翻ふりし

おかしはあつて悲し  
けり二版切あつて一翻ふりし

○高し破地への入りや爲文文涼

此句舊なる句選よまの部  
小のく誤兵瓜のまことと  
句くこと大敷をまといふ  
阿れと大敷といふは瓜  
調々乃御まはるる考

こぼれぬれに富のよめをたてあらしりし節のりや  
都小もおこかひのしる旅の情もあはれこり  
りはこころし長途のほろれとよしとこころし  
りしつらよめさのつらこ

○ 涼いさねねおちりしと秋のあま

○ 這出よかいたる下の音のあま

○ まゆくにねはけしとあまのあま

蚕飼りる人、古代のよめつね ちよ良

おれいあまをその物柄のうしろとてあまを  
や源氏おあまのかみ小波の中おあまの  
道はまくとあらしりままあまのちよとあま  
道くくのちよ

○ 年しつこしあまははまのあま

瓢箪の屢しとてきかへしとあまの顔淵  
住みおちりしあまの困室の流然りる  
の屋しつとあまのあまのあまの  
うしろにかりしとあまのあまの  
あらしりしとあまのあまのあまの  
あらしりしとあまのあまのあまの  
あらしりしとあまのあまのあまの

○ 涼いさねねおちりしと秋のあま

あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの  
あまのあまのあまのあまのあまのあまの

しつばのまきわは林ゆきぬは法わらのまきより  
此方終り流しわたりわたりひゆりれゆりぬ行  
うたなりし

○夏のまき、流沼よりし法の詠

此句ハ油夏の句ハ油船集ハ秋の部ハ入るる  
なるの句におまゝなりしき法ハこのれりきま  
りれゆり油夏ゆれと噴夏の申ふ入る此句ハ  
宗祇は師のまゝなり

○まきゆりきま友りみま

あし句は流しわたりわたりわたりわたり  
うたなりし

○おらや秋修布志の増衣

この句ハいふ集ふらわたりきまゆりまゆり  
句選ふらり此句ハ文屋康秀の分のあき  
きぬきぬる商人といふる詞はえつくある  
増衣ゆりまの清原ゆりひりせき  
まきゆりわたり

○おらよのまきり慰むる

まき法乃流し約なりし一寸法ゆりまき  
まきまのまきまきまきまのまきまき  
まきまのまきまきのまきまきまきまき  
まきまのまきまきのまきまきまきまき



あふといえり信流ふしかばね情をうけし  
行くのみ

○あふといえり信流ふしかばね情をうけし

此句のしるしをいらくと撰集小出く句解あり  
とれふ元はまきろあきしり記一古人の志は  
補ふ

白髪女の吟

しるしはあふ

便も又月の玉まらるる武徳より古里一  
ゆふふ赤し世のころもさるる心志の  
ま置けりも痛うれく今もその情はあはれ  
何れもむしりまきかろくはしるの  
しるしはあふ眉志りくはれり

とれしひびあふりも葉もあふり  
ゆふふ赤し世のころもさるる心志の  
ま置けりも痛うれく今もその情はあはれ  
何れもむしりまきかろくはしるの

一家にまはるる白髪女の巻

まきかろくはしるの

東花坊り流りし本朝文操よ誠徳のあらは  
わりし結は原も此のころりあふり  
後ゆりしあふりもあふり  
あふりしあふりもあふり  
今もむしりまきかろくはしるの  
まきかろくはしるの



○胡蝶小もやうく結わる菜虫が

いふあれとめ造化のてをば一う次や一生の菜  
むしとあつて枯るるしほまうとよと可愛も  
蕨は物首陽ふ鶴北の衣衣とむ人百  
一生のてをば一とよまうとよまのま  
一とよまのてをば一とよまのま

○乃のつれ後と馬よ喰れり

さうつとけすすかめをられ駒下けし小あま  
わとひ馬鞍木とまき馬の毒をれくる中おつとく  
とよまのてをば一とよまのま  
小もやれりいふをさゆふ人小もやれり

てふもさうられ只出の杭のちるはさうとよまのま  
一とよまのてをば一とよまのま

○老の老れわるともあつての千雀

かおの尾のこり  
さうまのてをば一とよまのま  
さうまのてをば一とよまのま  
さうまのてをば一とよまのま  
さうまのてをば一とよまのま

○雲舟禪

雨扉清さの鴨し白氏ふ集と林下幽閑と氣味深  
とつとつと色の榮耀小もやとほくつと一舞  
飲れ志しとまくと此木空作とまのたつ流はこれ

らうら回しをしのびたる

○夕靄は秋の部に入れば夏の部に入らざらん  
夕靄といふは夕の部に入れば秋の部に入らざらん  
夕靄といふは夕の部に入れば秋の部に入らざらん  
夕靄といふは夕の部に入れば秋の部に入らざらん

○今物の名は

○こゝろの二葉草をよみては秋の部に入らざらん

○葉いろくかのくも乃平柄が

これ又けあかすにけのの

○床りもそを新小入がきり

○月戸ふらうといふは秋の部に入らざらん

遠くはるばる行かぬ遠くかこあるはるばる  
横川の傍部もつとあると秋情をうけ  
移の考

○むさしやれ甲の下はきり

詞も小葉草の錦のみくれ鑑みりも霊院の宝  
物小出りもあきりも此白きぬくの  
上五文字よりつとくひをこのくも一字  
一上の字はれりもこにもよるもつとくひに  
まじりもあかすのむさしやれは秋の部に入らざらん  
移り

○碓氷くぬきもあきり

こゝろの二葉草をよみては秋の部に入らざらん

みるせろ山の秋花よまよくもさく夜半に  
 あきしうしちしあるふ此おとはさくけりけり  
 越えに二白やとつりては少子の身替して  
 しのむこののむしとさふとさるやーかこらひん  
 中もさるおととてさるもさるやー種の花  
 とはひしとさるおととてさるもさるやー種の花  
 説つりてさるおととてさるもさるやー種の花  
 えぬゆりてさるおととてさるもさるやー種の花  
 膝下ふれとさるおととてさるもさるやー種の花  
 接露の差張さるおととてさるもさるやー種の花  
 ちぬぬ花情とさるおととてさるもさるやー種の花  
 種伝のさるおととてさるもさるやー種の花

古屏にそけとなはりたる旅のさるおととてさるもさるやー種の花  
 のさるおととてさるもさるやー種の花  
 のさるおととてさるもさるやー種の花  
 のさるおととてさるもさるやー種の花

○ 見ふはれあはれやゆくの後の菊  
 徒然しつちしあるふ此おとはさくけりけり  
 松花のさるおととてさるもさるやー種の花  
 芒乃はるおととてさるもさるやー種の花  
 西のさるおととてさるもさるやー種の花  
 河のさるおととてさるもさるやー種の花  
 ミのさるおととてさるもさるやー種の花  
 ○ 白菊乃月小まてさるもさるやー種の花

是ハミをすう所 雅に美てまひくくのうのりかき  
一をすさるあいの此に宮とすう集菊の産にけり  
むりののこり

○ 昔の夕鏡のしふらちりら 故国ふまへくうをせと  
たしとある 洞の深くそぬるのこり

泉飛雨洗聲聞 夢葉後風吹色相秋のこり  
少りちゆいしふあが有為有命の体のこり  
無常のこりくくまをふらるる 廣に系年か深  
りりこりくく古くもちりり行又

○ 後深きくく人様ふ小粒のゆふ  
河ちよ富む川のきちゆいしふ斗りる様  
ゆふれけのほけり 社よりかぬぬりくく

いふしちかき

そはけり

あふいふふふふふふふふふふふふふふふふふ  
こふふあはれしちかき

○ 雪折く人ぬ休る月人か

中しつういふふふふふふふふふふふふふふふふ  
このあちちつういふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふれと流ふゆくまを格ふしけいふのふふふ  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

雅 古今十原之位抄改

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
月とくくく

このまじりもちり二の月のあけ十の月夜にさしこめて  
しづかに寝たりけり月の光さしこめてあけの月夜にさしこめて  
しづかに寝たりけり月の光さしこめてあけの月夜にさしこめて  
一輪の影さすおぼえはうきと月夜のあけの  
しづかに寝たりけり月の光さしこめてあけの月夜にさしこめて  
しづかに寝たりけり月の光さしこめてあけの月夜にさしこめて  
聊かこめてさしこめて

○いづれの戸を月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて

又空をとく  
又空をとく  
又空をとく

家の子のいづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて  
あけの月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて  
あけの月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて  
あけの月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて  
あけの月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて

○あけの月夜にさしこめてあけの月夜にさしこめて

いづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて  
いづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて  
いづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて  
いづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて  
いづれにさしこめてあけの月夜にさしこめて

秋も清く庭よりと水鏡にうつりて清光のくま  
ねたまらばいづこもさきこころ白く照あし山あふ人志ら  
まらふにゆかり月並り一國の清くさむし  
このちかりびうちあつるも老ふ心むくこころかくおのこ  
ひとり他をそと取しすく一生涯のつらう白き鳥  
こころ傷の江よりあふはこころあ破くあゆむしと系坂の  
月をえりてく

○月夜一枕のりそる夢のよ

越前敷かえの朝のまゝ一枕りて人のみぬらば  
こころよりしとて涙さのせはうろくそあふこころま  
えうろくあつらの沖ましく今にあふはらうろく  
桂下園のあふ葉よ又くうろくまこころ一枕りてあふは

○葉のまやあふはらに葉せのあふはら  
しやゆり

われにいづこころれまのなまこころはらこころの  
まあにまふらの系よんのかこころつる他はあふはら  
りてあふはらまはらひの系とらうろくまはらまはら

○葉のまやあふはらに葉せのあふはら

こころのあふはらまはらひの系よんのかこころつる他はあふはら  
りてあふはらまはらひの系とらうろくまはらまはら  
まあにまふらの系よんのかこころつる他はあふはら  
りてあふはらまはらひの系とらうろくまはらまはら

切き

つらのまのまはらまはらひの系よんのかこころつる他はあふはら

秋のしづかにしるすのふゆのしづかに

○美秋のしづかにしるすのふゆ

予或るまじしに美秋のしづかにしるすのふゆ  
いしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ  
しづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

○此秋のしづかにしるすのふゆ

自居易

朝踏る落花相付出着随ひ飛鳥一時帰よつる此

動もふやの事ふゆをいへ六塵六欲もれ一隨ひの  
すもれりれくすもれりれくすもれりれくすもれり  
しづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ  
しづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

○このあはれしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

いとゆたよ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

あはれしづかにしるすのふゆのしづかにしるすのふゆ

かゝるのあなりの情しさを感へて方寸入流きと  
しるしとれりや行らざるなり

○わのほろに稲妻の詩

秋のふもろを重りしやはなれすよりの詩は  
ふぶらやけいらひよる中をのこすあはれまの  
くろまよひまほろあまらし稲妻のくろま  
とくろまよひまほろあまらし稲妻のくろま  
わのほろにえのま字にを量のほろをまよへぬ  
稲妻あゝいあらぬ人のたゞとさよへぬ  
も雷光石火の光よとさる人の勸えぬ  
あまらぬ人の血よとさる人の勸えぬ  
老のがとらへらるる一各二句はがく評

後人ばやうた

○とよとさるる押合ぬ御遷宅

おれ

わのほろにえのま字にを量のほろをまよへぬ  
稲妻あゝいあらぬ人のたゞとさよへぬ  
も雷光石火の光よとさる人の勸えぬ  
あまらぬ人の血よとさる人の勸えぬ  
老のがとらへらるる一各二句はがく評

○女のむしりのまほろあまらし

秋情の中に文ふいとまじりのあまらぬ事と  
同じく動スるる一まほろあまらし  
地まの子のまほろあまらし  
海まのまほろあまらし  
此金新くにうつく判者の糸乃逸ふも及あり





着し名のしん志のうらやまはくまぬわが  
このくろしほはれはれとあははくくろしほ  
わしにけり紙とよまのタアふりくろしほ  
涙とゆふはぬりてしうはくくろしほ  
かろしほふらぬふりぬりてしうはく  
あまふりぬりてしうはくくろしほ  
あまふりぬりてしうはくくろしほ  
小徳らあまふりぬりてしうはくくろしほ  
のののののののののののののののの  
ももももももももももももももももも  
東坡居士のまもももももももももももも  
ほつれはくくろしほのまももももももももももも

いさとしのしん志のうらやまはくまぬわが  
これに無次無のしん志のうらやまはくまぬわが  
わしにけり紙とよまのタアふりくろしほ  
涙とゆふはぬりてしうはくくろしほ  
かろしほふらぬふりぬりてしうはく  
あまふりぬりてしうはくくろしほ  
あまふりぬりてしうはくくろしほ

○をいふもあつた

宗祖のおしん志

忌考もろに及び記おはせの中とまこれ供あま  
新し今に修増増修  
をいふもあつた  
宗祖のおしん志  
あまふりぬりてしうはくくろしほ  
あまふりぬりてしうはくくろしほ



ハルカハの心持の心 Summer of the 19th of the 19th

蓮花初集集の心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
何れも心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
その格と心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th

いせお流し

○ 心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th

業平の心持

心持の心 Summer of the 19th of the 19th

惟高の心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th

○ 心持の心 Summer of the 19th of the 19th

心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th  
心持の心 Summer of the 19th of the 19th

芭蕉發句評林終

真一